

言霊のうつわ—西洋中世の手写本における文字と彩色画—

奨励	清瀬みさを〔きよせ・みさを〕
奨励者紹介	同志社大学文学部教授 〔研究テーマ〕西洋美術における表現の形と意味の分析

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

（ヨハネによる福音書 1章1―5節）

はじめに

2020年度の春学期は、新型コロナウイルス感染防止のために、すべての授業がオンラインとなりました。教員・学生ともに未知の、実態のない仮想空間での学びに悪戦苦闘する日々を過ごしました。とりわけ新入生は、大学構内に立ち入ることも、友達をつくることも会うことも、サークルやクラブなどの課外活動もできず、孤独に苦しんだことでしょう。2021年度も新型コロナウイルス感染状況が不安な状況のうちに始まりました。

2020年度の秋学期にキリスト教文化センターから頂いた奨励の統一テーマは、ローマの信徒への手紙12章12節より「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」でした。このテーマに対して、私は、西ヨーロッパ中世の写本文化を取り上げることになりました。2020年度春学期のオンライン授業では、学内外の図書館が自由に利用できなかったこともあり、ただでさえ活字離れが著しい学生たちが、日々の学び、学期末のレポートの準備に際して、ほぼネット検索資料だけに頼る学期となりました。書架の森を逍遙する喜びを知ることなく、スマホの画面で検索するネット資料で事足りるという風潮が学生たちの間に定着しつつあることに、私は大変な脅威を覚えました。そこで、人間が思想や記録を他者に伝えるために用いてきた記録媒体の歴史の中で、文字が言霊（ことだま）のうつわとしての特徴的な価値をもち、一言一句が祈りとともに筆写された書物の価値、そして美的な価値を競うようになった西洋中世の写本文化について語ってみたいと思った次第です。

最初に、ひとりの修道士が傾斜のある筆写台上の「**犢皮紙**」に向かい、右手に羽ペン、左手にナイフを持ち一心に聖書の『詩篇』を筆写する姿をお見せしておきましょう（図1）。12世紀中葉にカ道バリーの修道士エドウィンによって制作され、現在はケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ図書館に所蔵されMs. R. 17. 1という写本番号で登録されているフォリオ版『エドウィン詩篇』Eadwine Psalterの283葉裏面全体に描かれた彩飾画です。

「写本」とは、原本originalに対する写し、つまり複製を意味する言葉です。西洋文化圏では、写本の中でも手で筆写したものを特に**手写本**manuscriptと呼びます。英語、フランス語のmanuscript、ドイツ語のManuskriptは、ラテン語の「手でmanu」「書かれたscriptus」手書き原稿manuscriptumから派生した言葉です。国際的に個別の手写本はmanuscriptを略してMs.・・・と記載されます。

手写本と紙

まず、図1中の修道士が文字を書き記している筆写材の羊皮紙、筆記具の羽ペン、インクについて紹介した後で、なぜ中世西ヨーロッパの手写本中に、筆写する修道士や高位聖職者の姿が描かれたのかを考えてみたいと思います。

中世初期の西ヨーロッパでは、筆写材としてエジプトなどから輸入したパピルスを用いていました。パピルス紙とは、ナイル川流域に繁茂するカヤツリグサ科のパピルス草から茎の髄を取り出して薄く削ぎ、平らに重ねて圧縮・膠着・乾燥させた筆写材です。パピルスは「紙」paperの語源となりましたが、繊維をほぐして膠着剤を混ぜて漉く、という工程を経た筆写材である「紙」と区別されます。「織る」という工程を経た「布」と「不織布」の違いと同じ区別です。古代地中海世界には、もうひとつの重要な筆写材がありました。紀元前2世紀頃から小アジアのペルガモン王国で生産が始まったとされる「羊皮紙」parchmentです。西ヨーロッパ世界では、7～8世紀頃になると、日常的な文書や下書き、短い卷子本（巻物）には軽くて安価なパピルス紙を、教典、法典、外交文書といった重要な文書にはたとえ重たく、いかに高価であっても耐久性に優れた羊皮紙、といった使い分けをするようになりました。

中国の製紙技術がヨーロッパに伝わるのは12世紀のことであり、最初は木綿のぼろや藁、後には木材を粉砕したパルプを用いて機械生産したものでした。印刷には適性がありますから、15世紀半ばにドイツのグーテンベルク（Johannes Gutenberg, ca. 1398-1468）が考案した活版印刷以降に普及してゆきます。西ヨーロッパの「紙」（洋紙）と区別される我が国の「和紙」は、中国由来の製紙技術が日本で独自の展開を遂げたものです。コウゾやミツマタ、ガンビなどの植物の枝や幹をほぐして細く長い繊維を取り出し、トロロアオイという植物の粘りを膠着剤に混ぜて漉くために、繊維が長く丈夫で軽い、優れた筆写材です。和紙は、オランダの東インド会社を通じて17世紀に西ヨーロッパに伝わりましたが、その優れた特性に注目し晩年の銅版画に採用したのが画家・版画家レンブラント（Rembrandt Harmenszoon van Rijn, 1606-1669）でした。和紙は、現在でも筆写材のみならず、障子やペーパークラフト、美術作品の修復に欠かせない素材として重用されています。何よりも日本の和紙製造技術の粋を極めるのが日本の紙幣であることを特筆しておきましょう。

西ヨーロッパと羊皮紙

さて、西ヨーロッパ中世の筆写材となった「羊皮紙」は日本では馴染みのない、羊、山羊、牛、豚などの皮をなめした獣皮紙であり、最も汎用性が高い「羊皮」が獣皮紙の総称となっています。英語のパーチメントparchmentは、先に触れた古代地中海世界における羊皮紙の一大生産地「ペルガモン」Pergamonに由来しますが、フランスでは羊皮よりも仔牛の獣皮紙を珍重したためにヴェラムvellum（**犢皮紙**）とも呼びます。

羊皮紙の冊子本が出来上がるまでの工程

西ヨーロッパ中世には、羊皮紙は人の心臓よりも尊いとされました。なぜなら、獣皮紙は、和紙、木簡、石、粘土板と異なり命ある獣を**屠**ります。そして屠られた獣の命よりも、筆写する人ひとりの命より遥かに永く何世紀も後にまで御言葉や思想、知識を伝え遺すことができたからです。高級な羊皮紙で保存状態がよければ、千年でももちこたえるために、西洋では現在も特別な外交文書などが羊皮紙に記され蜜蝋で封印される文化が残っています。

獣皮紙を製造するためには何段階もの工程と技術が必要としました。簡単に、羊皮紙の製造から冊子本（卷子本から冊子本への移行は4世紀頃とされます）が出来上がるまでの工程をご紹介します。羊皮紙の製造は、まず、羊、山羊、豚、牛などの家畜の皮を剥ぎ、何日か石灰水に浸けて肉片や毛などを除去した皮を木枠に張って乾燥させ、0・3mm～0・4mmほどにまで薄く削ぎます。最高級の羊皮紙は千円札の厚さ、0・1mmにまで薄く削ります。さらに表面を軽石やその粉で磨き、インクや顔料（鉱物性の絵の具）がよく定着し、劣化しないように灰や石灰、石膏、亜麻仁油、と言った工房独自の下地処理をして、ようやく筆写材としての白い羊皮紙が完成します。なかには、ローマ帝国皇帝やビザンチン帝国皇帝の着衣のみに許された紫色、気の遠くなる程高価な染料である貝紫で染めた特別な紫羊皮紙もありました。

羊皮紙が完成したら、木枠から外してロール状に丸めて取引されました。和紙と比べて羊皮紙は薄くても大変重いです。図2は、手写本中の羊皮紙製造業者が修道士と取引している場面、ふたりの間には木枠に張った獣皮とそれを削ぐ刃物が描かれています。羊一頭から製造された羊皮紙一枚を裁断すると、洋紙のA4が6枚取れます。現在、日本の羊皮紙工房での標準価格は、羊皮紙全紙一枚がだいたい1万5、6千円しますから、A6サイズ400頁の本をつくるのには羊9頭分、つまり紙代だけで約15万円必要となります。羊皮紙全紙を二つ折にしたものをフォリオfolioと呼び、四つ折をクアルトquarto、八つ折をオクターヴォoctavoと言います。当然、傷のない大型の判型ほど高価ですから、フォリオ版は聖書や典礼書など重要な書物に用いられました。頁番号を振るのは印刷本の習慣です。中世後半、13世紀以降の写本では、頁ではなく羊皮紙一枚を二つ折にした片面を一葉とする葉番号を用い、一葉の表をレクトrecto、裏をヴェルソversoと呼び習わします。

レイアウトを決めたら罫線を引き、文字を綴り、その内容を視覚的に補完する挿絵や周縁飾りを入れる場合は、獣皮に馴染む顔料（多くは鉱物性の絵の具）を用い、卵や樹脂などの固着剤で練って彩色（テンペラtempera技法）します。その彩飾画（手写本の挿絵）については後に説明いたします。多くは八枚重ね二つ折の16葉で一台の折丁quireを作り、中綴じし、現在の冊子本と同じく折丁をまとめて背帯で束ねて仮綴が出来上がります。最終的な装幀には、贅を凝らした宝石を散りばめた表紙に鍵をつけたものもあります。ここに、一例として聖グレゴリウス（Sanctus Gregorius Magnus papa, Gregorius I, 590-604）が執筆し、写生士たちが筆写する様子を刻んだ見事な象牙浮彫彫刻の典礼書表紙を挙げておきましょう（図3）。獣皮紙の冊子本は紙が歪んだり、抛れたりしないように和綴本同様に縦置きではなく、横置きにしました。

筆記具とインク

筆記具は大型の鳥の風切羽の根っこを切断し、インクを貯めるために切れ込みを入れた羽ペンです。英語のpenの語源はラテン語で羽を意味するpennaに由来するように、西ヨーロッパでは伝統的な筆記具です。紙や羊皮紙に文字を記す黒褐色あるいは紫がかった黒色のインクは、タンニンを多く含んだ樹木の**瘡**（**没食子**と呼びます）と鉄を煮詰めたアラビアガムを混ぜて作ります。この**没食子**インクで羊皮紙に書いた文字は、擦っても濡らして拭いても消えませんが、消すにはナイフで削るしかありません。図1の修道士が片手に羽ペン、もう一方の手にナイフを

持っているのはそのためです。

文字 言霊のうつわ

現代の新聞や雑誌の見出し、レイアウト、挿絵などの紙面構成の工夫は西ヨーロッパ中世のキリスト教文化に起源をもちます。手写本において、貴重な紙面を効率的に美しく活用し、視覚的に捉えやすい字体やレイアウト、段落や章の見出しとしての飾り文字、省略文字、挿絵や周縁部の装飾などへの飽くなき探求がありました。4世紀末にローマ帝国が東西に分裂し、5世紀後半に早くも西ローマ帝国が滅亡して以来、西ヨーロッパ世界は豊穡な古典文化もとともに識字率が壊滅的に低下してしまったことが背景にあります。国際語、教養語はラテン語であり、文字はラテン語のアルファベットでした。東のビザンチン帝国では古典古代の文化的素地にキリスト教が融合し高度に知的な文化水準が保たれていたのに対して、文字も書物もごく握りの知識人の特権となった西ヨーロッパにおいてこそ、上で述べたような工夫が必要となり、また書物は単なる知識や思想の伝達媒体に尽きない秘蹟そのものとしての、あるいは宝石のような価値をもつようになったのです。西ヨーロッパ各地の民族固有の俗語（話し言葉）が文字化されるようになったのは、16世紀の宗教改革期にラテン語の公用聖書が翻訳されてからのことであり、一般人の識字率が上がるのはさらにずっと後の時代のことです。

その中世東西の写本の違いを実感していただきましょう。図4は『ロッサーノ福音書』Codex purpureus Rossanensisと呼ばれる現存最古の挿絵入り福音書手写本の一葉です。6世紀にビザンチン帝国で制作され、貝紫で染めた横皮紙にギリシア語のテキストが金・銀の文字で記されています。文字のみ記された一葉では、左右二段組のテキストは段落冒頭の文字のみ他より大きく記されているだけで飾り気はありません。ここでは最後の晩餐とキリストによる洗足がキリスト教の画像伝統に従い具象的に描かれ、その下段に4人の預言者、そしてテキストが記されています。

ところが、7世紀のアイルランドの修道院で制作された横皮紙のフォリオ版聖書『ダロウ福音書』Book of Durrow（図6）に見るように、文字とケルト装飾が一体化した独自の写本文化が生まれました。ダブリンのトリニティ・カレッジ図書館蔵の『ダロウ福音書』は『ケルズの書』、『リンディスファーンの福音書』とともにケルト装飾写本を代表する一書です。これはウルガータ（ラテン語公用聖書）のマルコによる福音書冒頭の前で、左肩の装飾的な文様は、Initium evangelii Iesu Christi Filii Dei（神の子イエス・キリストの福音のはじめ）を導く最初の二文字IとNです。現代の印刷本、できれば聖書中の該当箇所と見比べて下さい。ここでは言霊のうつわである文字そのものが、呪術的とも言霊の憑依とも言える怪しくも不思議な力を感じさせます。テキストを読むこと以上に見るための聖具という側面ももったに違いありません。先に掲げたビザンチン写本（図4）や古代ローマのウェルギリウス写本一葉（図5）に見る合理的な書体の文化的背景との違いが生み出した文字文化の変容です。

西ヨーロッパの字体には、古代ローマのラテン語による銘文や写本は大文字のみの「ローマン・キャピタル体」、「ラスティック体」、「アンシャル体」などといった字体がありました。ケルト装飾写本『ダロウ福音書』（図6）のテキスト字体はインシュラー（アイルランド・アングロサクソン）体と呼ばれ、同じアルファベットでも古代ローマ以来の字体とは異なっています。アイルランド起源のインシュラー体は、次第に西ヨーロッパ全土に広がり、西ゴート体、メロヴィングガ体、ベネヴェント体などが整理され、紙面を節約し速記するための単語縮約形などの技法も凝らされてゆきます。北方のゴシック体、イタリアのフマニスト小文字、ローマン・アンティカ体と展開し活版印刷の字母の原型を形成しました。

修道院の写本制作室から御言葉を写すこと

さてここで、図1の修道士エドウィンが生きた西ヨーロッパ中世の写本制作の現場に立ち戻りましょう。

写本制作の多くを担ったのは、図2の羊皮紙製造業者と修道士との羊皮紙取引の場面に見るように、もっぱら限られた特権的な知のセンターである修道院においてでした。修道院の心臓は、知の宝庫である図書室と図書を生産する写本制作室scriptoriumでした。そこでは、写字や描画に才のある修道士たちが、肉体的な労働を免除され、ずらりと並んだ傾斜のある木製の筆写台codexに向かって黙々と仕事をしました。それは分業で、レイアウトの決定、罫線、文字、挿絵、周縁装飾という順で行われました。

修道院で筆写されたのは聖書、教父の著作、典礼書など宗教書がほとんどでした。神の栄光を賛美しつつ祈りつつ、一言一句の言霊を文字といううつわに容れて命を与える行為は、尊い神への奉仕でした。言葉による説教がその場で消えてゆくのにに対して、筆写し、それを美しく飾る手写本は、筆写した個人から離れて後世にまで永らえるがゆえに、よりいっそう尊いと見なされてきました。それは、ミサがキリストの聖体拝領に倣う行為であるように、御言葉を記した福音書記者に自らをなぞらえる行為と位置づけられます。それゆえ、図3の教皇聖グレゴリウスや手写本中に描かれたパリ司教ベトルス・コンバルドゥス（Petrus Lombardus, 1095?-1160）（図7）など学究の人として知られる聖人や高位聖職者が、福音書記者像の画像伝統（図8）に倣い、ことさら写本台に向かって御言葉を写しとる姿で表現される理由です。それゆえに多くの写字、挿絵を担当した修道士たちが写本中に栄えある自分の姿を、時には名前までも誇らしげに遺すことも許されたのでしょう（図9）。図1の修道士エドウィンに至っては、画枠部分に「書記」（つまり自分）が自らの地位と名誉を誇り、「文字」に書記の自負に対する賛同と称賛を述べさせるという対話形式の銘文を記してすらいます。

それは、ルネサンス期に出現する美術家の自意識に起因する自画像、自刻像と同列に捉えることはできませんが、中世西ヨーロッパにおける宗教書手写本と写字生の位置づけを考える上で特筆しておきたいと思います。

絵本化する書物宗教的価値から美的価値へ

西ヨーロッパ中世における知のセンターであった修道院の外界にも、もちろん年代記、政治、法律、商業に関わる記録や文書、世俗文学などの筆写に対する多くの需要がありました。それらの筆写を担ったのは、宮廷の尚書局、都市の書記など限られた教養ある世俗界のエリートたちでした。そして大学が成立する12世紀以降になると、学生アルバイト写字生が巷に出現し、13世紀になると世俗文学の需要に応じて受注制作する専門職としての写本工房、さらには書物の市も立つようになってゆきました。12世紀は、西ヨーロッパが十字軍遠征、聖地巡礼による東方世界からの知的・文化的・技術的な刺激をもとに、修道院を要として今日の繁栄の基を築いた時代、13世紀は大聖堂を中心とする都市が経済的・文化的に発展を遂げる時代です。写本制作の広がりも、そのような時代の知的な希求の願いです。ヘレニズムの時代、紀元前1世紀にアレクサンドリアの国立図書館が焼け落ちた時、灰燼に帰した書物は、40万巻とも200万巻とも言われます。西ヨーロッパ中世においては大修道院と云えども、所蔵した書籍の数は、古代地中海世界、その文化を継承するビザンチン文化圏とは比べものになりませんでした。しかし、この時代の西ヨーロッパにおける写本制作の拡大は、東の世界とは異なった展開を遂げました。

聖書やその註解書の内容を伝えるための手写本であったものが、識字率が低かったことに加えて、まずは宮廷人たちの美的趣味を満足させるために、筆写された聖なる文字を読むのではなく、挿絵を目で読む簡易版聖書が流行したのです。市井の人々にとって、聖堂を飾る絵画や彫刻、ステンドグラスもまた、目で読む聖書であり教会の教えであったのと同じ文化現象です。

そのような世俗の宗教書は、13世紀から14世紀にかけて『教訓聖書』Bible moralisée（図10）、『人類救済の鑑』Speculum Humanae Salvationis（ca.1324）、そして『聖書物語』Bible Historiale（1291-95）、『黄金伝説』Legenda Aurea（ca.1260）、など旧約と新約を対応させて（予型論的に）聖書の内容を絵本のように視覚的に簡潔に示すものでした。それは、王侯貴族だけの流行に終わらず、14世紀には、豪華な手写本とは対比して「貧者の聖書」Biblia pauperumと称される、様々な質の廉価版、さらには15世紀には素朴で簡素な木版によるものまで制作されました（図11）。

そのような簡易版宗教書の中でも、特に貴族の女性を中心に人気を博したのが時祷書でした。時祷書（ラテン語でhorarium、フランス語でlivre d' heures、英語でbook of hours、ドイツ語でStundenbuch）とは、聖母信仰を基調とし、修道院の聖務日課書を抜粋・短縮して挿絵を付した一般信徒向けの私的な祈祷書であり、現存する装飾写本のうち最大多数を占めます。内容的には、月暦、福音書の抜粋で始まり、中核となる聖母マリア聖務日課（マリア伝とキリスト伝）のほかに詩篇や悔罪詩を加えた死者のための小聖務などの祈祷文の抜粋で構成されています。注文者である王侯貴族は贅を尽くし、腕のたつ画家を雇い豪華を競う手写本を制作させました。そして時祷書は特定の個人のものであるために、その所有者本人や家族の肖像や紋章を描き込んだり、内容が私的な意向で編集されることもありました。また宝石にも勝る特別な贈答品としても流通しました。図12は、家臣から聖書の彩飾写本を贈られるフランス国王シャルル五世を描いた一葉です。

庶民には無縁の、王侯貴族の贅沢品であった豪華な手写本芸術の全盛期を築いたのは、フランドル地方とフランスの画家たちでした。フランドル地方では、15世紀前半にヤン・ヴァン・エイク（Jan van Eyck, 1395-ca.1441）が、板を支持体とする祭壇画や肖像画の分野で、油彩技法を完成させなければ達成できない極微の細部まで触覚的な質感をもつ視覚革命を遂げた時代でした。それは、「初期フランドル絵画」と呼ばれます。テンペラ技法における顔料の練り剤を油に代えることで、艶、乾きが遅いこと、重ね塗りができることから極細の筆で時間をかけ、宝石のような艶やかな色彩で極微の極限まで鏡に映る現実のような絵画表現が可能になったのでした。

同じ時期、15世紀初頭のアルプスの南は、フィレンツェが主導的な役割を果たした初期ルネサンス期にあたります。マザッチョ（Masaccio, 1401-1427）、ドナテッロ（Donatello, ca.1386-1466）、ブルネッレスキ（Filippo Brunelleschi, 1377-1446）らの美術家たちが、古典を理想とする自然主義的なリアリズムを目指して視覚革命を推し進めていました。そして、その芸術は同業者組合が主催者となり大聖堂付属洗礼堂の扉浮彫制作者を決定するコンクールを実施したように、公的であり市民的な芸術運動であったのとは、手写本芸術は、注文者も受容者も対照的でした。イタリアのフレスコ壁画が聖堂の漆喰塗りの大壁面や天井いっばいに描かれ、多数の人間が空間的距離をもって眺めるのとは異なり、フランドル絵画の微細で精緻を極める表現様式は、独りの人間が手の中で至近距離から愛でる写本中の小さな彩飾画に適性を示すものであったと言えるでしょう。

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』

豪華な手写本の命ともいえる挿絵は、顔料の丹（鉛丹minium）を多用することからminiature（ミニアチュール）と呼ばれます。それが細密な表現であるためにminiatureと呼ばれると誤解され、ペンダントやブローチの肖像細密画miniatureと混同されがちな言葉です。美術史分野では、語弊を招かぬように写本彩飾画をilluminationとも呼びます。日本語の訳語にはまだ揺れがありますが、ここでは「彩飾画」で統一したく思います。絵画技法としては、顔料（色のついた鉱物を粉にした絵の具）を獣皮に固着させるために、油ではなく卵白や膠を用いるテンペラ技法です。

豪奢を愉しむ王侯貴族は、腕の良い画家を雇い、特級の横皮紙や羊皮紙に、金を惜しみなく使い、同じ顔料であっても発色がよく鮮明な色彩が経年劣化しにくい高価な顔料を選びました。例えば、赤は鉛丹、青はラピスラズリ、緑はマラカイト、黄はオーピメントなどが選ばれました。なかでも、ラピスラズリから精製するウルトラマリンは、輝度が高く美しい青で、現在

でも金と等価に取引されるほど高価です。フェルメール（Johannes Vermeer, 1632-1675）の【青いターバンの少女（真珠の首飾りの少女）】（1665年、デン・ハーグ、マウリッツハイス美術館蔵）の印象的な青いターバンに用いられているのが、そのウルトラマリンです。気の遠くなるような金銭と美術家の技術が結晶した豪華な彩飾写本は、文字が知的な特権者のものであった以前とは別の意味で、つまり宝石よりも高価な財産的価値として新たな特権者のものとなりました。

豪華な手写本が芸術的精華を達成するのが中世末期の14世紀から15世紀後半、活版印刷術が普及してゆくまでの時代でした。時代的には同じ時ではありますが、ルネサンスと初期フランドル絵画に共通するリアリズムと区別される、豪華な手写本全盛期を「国際ゴシック様式」と呼びます。国際ゴシック様式とは、1400年の前後30年から50年の間、西ヨーロッパ各地の宮廷を中心に流行し、祭壇画や彩飾手写本において、ルネサンスの骨太なリアリズムとは逆の、繊細優美・工芸的な宮廷趣味を特色とする美術様式です。その国際ゴシック様式の頂点を極めるのが、世界で最も高価で美しい書物と評価されている『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』です。ここに、宗教書手写本が言霊を写す聖なる価値から彩飾による美的価値へと転換を遂げた一例を御紹介いたします。

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』Très Riches Heures du Duc de Berry

この時祷書の注文者は、ヴァロワ朝フランス国王ジャン二世美善王（JeanII, 1319-1364）の子で、「華麗公」le Magnifiqueという異名で呼ばれるジャン一世（Duc de Berry, Jean I, 1340-1416）でした。公は、先に図12で紹介した国王シャルル五世の弟にあたり、ベリー公、オーヴェルニュ公、ボワチエ伯を兼ね、異名にふさわしく破格の豪奢を謳歌しました。17もの宮殿、城館、居館を所有する普請道楽、宝石蒐集、美術・工芸の愛好家としてつとに知られます。この写本の冒頭月暦と対になった暦絵一月（図13-1、13-2）には、公自身を取り巻く華やかな宮廷の宴会が描かれています。公は、影しい猟犬、アフリカから取り寄せた様々な動物を飼育していたという逸話にも事欠きませんが、彼が後世に名を残したのは、当代一の貪欲な蔵書家であったことです。蔵書300点のうち190点が自ら発注した手写本で、そのうち121点が装飾写本、しかも、当時流行した時祷書だけで大型版、小型版を併せて15点も所有していました。腕のよい画家（絵師）を大勢雇って制作させた美しい彩飾画で有名な時祷書を挙げるだけでも5点ありました。その中でも彩飾画、周縁装飾の洗練された美しさで他を圧倒するのが『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』と呼ばれる手写本です。

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』は、現在、フランスのシャンティイ、コンデ美術館に所蔵されているフランスの至宝です。版型29・4×21・0センチ、特上の楮皮紙206葉・412頁からなり、大型の彩飾画66点、小型のものが65点も含まれています。ベリー公晩年の1410年頃、選りすぐった能筆家、彩飾画家、装飾文字師（装飾的な頭文字をルブリケーション rubricationと呼びます）、周縁部装飾画家たちが総力を挙げて制作を始めました。ところが、公も、時祷書中の全ページ大彩飾画35点を描いた画家兄弟ともに、おそらくはベストで1416年に没しました。公の死後、未完の手写本は、アンジュー公ルネ（Renéd' Anjou, 1409-1480）の所有を経て、サヴォイア公カルロー一世（Carlo I di Savoia, 1468-1490）の手に渡った時に画家ジャン・コロンプ（Jean Colombe, ca.1430-ca.1493）が彩飾画は完成しましたが、周縁部装飾が未完の頁、罫線のみが引かれた頁があります。世界の至宝は、実は未完のままに終わっています。

ベリー公が按捺した彩飾画家は、フランドル出身のランブール兄弟（Freres de Limbourg）でした。ヘルマン（Herman/Hermant, ca.1385-1416）、ポール（Paul/Polleke/Polequinen, ca.1387-1416）、ヨハン（Johan/Johanneke/Jacquemin/Jehanequin, 1388-1416）の三兄弟は、1402年、ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公（Philippe II de Bourgogne, Philippe le Hardi, 1342-1404）に雇われて手写本彩飾に携わり、豪胆公の死後、その実兄ベリー公に仕えることになりました。すぐに公のために『ベリー公の美しき時祷書』（Belles Heures du Duc de Berry）（ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵、1409年完成）と呼ばれる手写本の彩飾画で腕を認められ『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』の制作に取りかかりました。

すべての彩飾画、飾り文字、周縁部装飾ともに、ウルトラマリンと金、高価な顔料を惜しみなく使った華麗な色彩、繊細な描線、ほっそりと華奢で優美な人体、自然主義的な動植物の描写、洗練された装飾性が特色として挙げられます。巻頭の有名な十二月の月暦図（図13-1、13-2）に見るように文字は様式化された美しいゴシック体であり、暦絵には上部に黄道十二宮図、その下に、ベリー公の城館や所領の田園風景を背景に繰り広げられる月々の行事や労働が配されています。そこでは、現実世界では重労働で喘いでいたに違いない農民も、着飾った貴族たちの遊びと同じように美しい情景として描かれています（図14）。月暦に続く時祷書本体においても、テキストを伴わない彩飾画だけの頁、テキストがもはや絵画作品中のひとつの装飾的要素に変化したような頁（図15）も見られます。頁全体を占める彩飾画のみならず、小さな彩飾画までが、さらには周縁部装飾までもがテキストを視覚的に補完するというよりも、もはや一点の絵画作品や装飾デザインとして自立してゆく現象でした。それは、識字率の低い西ヨーロッパ、しかも活版印刷術など遠い未来のことであった時代に、王侯貴族の宮廷趣味と細密描写を得意とするフランドル絵画とが交差したところに生じた芸術的精華でありました。近代における絵本の成立、そして新聞、雑誌さらにはネットの画面の画面構成、さまざまなフォントに至るまでのルーツはその歴史的延長上にあります。

おわりに

今回の奨励では、文字が言霊（ことだま）のうつわとしての特権的な価値をもち、一言一句が祈りとともに筆写された書物の価値、そして美的な価値を競うようになった西ヨーロッパ中世の写本文化についてお話ししました。「ネットネイティブ」を自認される学生の皆さんは、今一度、図1の修道士エドウィン像、図3の聖グレゴリウス像をご覧下さい。西ヨーロッパ中世のキリスト教文化において、文字は、福音書記者に自らをなぞらえ、祈りつつ、神に感謝しつつ、一言一句、果てしない忍耐をもって御言葉を写し取る言霊のうつわでした。一心不乱に文字を写す日々の行為が、今回の奨励のテーマである「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」という言葉と重なる行為であったことを知って頂ければ幸いです。

一刻も早く、世界中の新型コロナウイルス感染症が終息し、誰もが健やかな日常生活を取り戻せることを切に祈りつつ、

2020年10月28日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録

※図の表示はホームページでは省略します。